

見えない存在、無の色

07 Invisible Existence, Color Of Nothing

私達の眼は光を感じる事で世界を見ています。光を感じる事が見るということであるならば、「黒」という色は私達の眼がもっとも光を感知していない、いいかえれば「最も見えていない」部分だと言えるでしょう。そして究極の黒が「いっさいの光を反射しない存在」であるならば、それは「見るができない」存在だといえます。

20世紀にはいつて、人類はそのような究極の黒がこの世の中に一つだけ実在することを明らかにしました。それはすべてを飲み込んでしまいそこからは光ですら逃れる事ができないといわれる存在、ブラックホールです。ひとたびブラックホールに飲み込まれた光は決してそこから抜け出す事ができないため、ブラックホールに吸収された光が私達の目に届く事はありません。「一切の光が返ってこない存在」、ブラックホールこそが究極の黒だといえるのです。

実は近代科学が明らかにしたこの「見えない存在」としての「黒」を、日本で昔からなれ親しまれた伝統芸能の中に見ることができます。それは文楽において人形を操る人、または歌舞伎の舞台上で歌舞伎役者の手助けをする人、つまり「黒衣（くろご）」です。これらの伝統芸能では黒は見えないものという約束事があり、黒い衣装で全身を包んだ「黒衣（くろご）」は見えない存在であるとされているのです。この決まり事を理解していないと、黒衣の存在が気になって舞台を楽しむ事ができません。実際に姿を消す事はできなくても黒衣を纏う事で、「見えない」「いない」ということになっている。歌舞伎や文楽はそんな知的なフィルターを通して見る事で舞台から美しい幻想を引き出しているのです。